

- 1 . ついで主はモーセに告げて仰せられた。
- 2 . 「アロンと彼とともにいるその子らを連れ、
装束、そそぎの油、罪のためのいけにえの雄牛、
二頭の雄羊、種を入れないパンのかごを持って来、
- 3 . また全会衆を会見の天幕の入口の所に集めよ。」
- 4 . そこで、モーセは主が命じられたとおりにした。
会衆は会見の天幕の入口の所に集まった。
- 5 . それで、モーセは会衆に言った。
「これは主が、するように命じられたことである。」

- 6 . それから、モーセはアロンとその子らを近づかせ、水で彼らを洗った。
- 7 . そして、モーセはアロンに長服を着せ、飾り帯を締めさせ、
その上に青服をまといせ、さらにその上にエポデを着けさせた。
すなわち、エポデを帯で締め、あや織りのエポデをその上に着けさせた。
- 8 . 次に、モーセは彼に胸当てを着けさせ、その胸当てにウリムとトンミムを入れた。
- 9 . また、彼の頭にかぶり物をかぶらせ、さらにそのかぶり物の前面に、金の札すなわち聖別の記章をつけさせた。
主がモーセに命じられたとおりである。

- 10 . ついで、モーセはそそぎの油を取って、幕屋とその中にあるすべてのものに油をそそいだ。
こうしてこれらを聖別した。
- 11 . さらにそれを祭壇の上に七たび振りかけ、祭壇とその用具全部、また洗盤とその台に油をそそいで、これらを聖別した。
- 12 . また、そそぎの油をアロンの頭にそそぎ、油をそそいでアロンを聖別した。
- 13 . 次に、モーセはアロンの子らを近づかせ、彼らに長服を着せ、飾り帯を締めさせ、彼らにターバンを巻きつけさせた。
主がモーセに命じられたとおりである。

- 14 . ついで彼は罪のためのいけにえの雄牛を近寄せた。
そこでアロンとその子らは、その罪のためのいけにえの雄牛の頭の上に手を置いた。
- 15 . こうしてそれはほふられた。
モーセはその血を取り、指でそれを祭壇の回りの角に塗り、
こうして祭壇をきよめ、その残りの血を祭壇の土台に注いで、これを聖別し、その贖いをした。
- 16 . モーセはさらに、
その内臓の上の脂肪全部と肝臓の小葉、二つの腎臓とその脂肪を取り、それを祭壇の上で焼いて煙にした。
- 17 . しかし、その雄牛、すなわちその皮とその肉とその汚物は、宿営の外で火で焼いた。
主がモーセに命じられたとおりである。

- 18 . 次に、彼は全焼のいけにえの雄羊を連れ出した。
アロンとその子らはその雄羊の頭の上に手を置いた。
- 19 . こうしてそれはほふられた。
モーセはその血を祭壇の回りに注ぎかけた。
- 20 . さらに、その雄羊を部分に切り分け、モーセはその頭とその切り分けたものと内臓の脂肪を焼いて煙にした。

- 21 . それから、その内臓と足を水で洗い、モーセはその雄羊全部を祭壇の上で焼いて煙にした。
これはなだめのかおりとしての全焼のいけにえで、主への火によるささげ物であった。
主がモーセに命じられたとおりである。
- 22 . 次に、彼はもう一頭の雄羊、すなわち任職の雄羊を連れ出した。
アロンとその子らはその雄羊の頭の上に手を置いた。
- 23 . こうしてそれはほふられた。
モーセはその血を取り、それをアロンの右の耳たぶと、右手の親指と、右足の親指に塗った。
- 24 . さらに、モーセはアロンの子らを近づかせ、
その血を彼らの右の耳たぶと、右手の親指と、右足の親指に塗り、モーセはその血の残りを祭壇の回りに注ぎかけた。
- 25 . それから彼はその脂肪、すなわちあぶら尾、それと内臓の上の脂肪全部
また肝臓の小葉、および二つの腎臓とその脂肪、それからその右のももを取った。
- 26 . それにまた、主の前にある種を入れないパンのかごから、
種を入れない輪型のパン一個と、油を入れた輪型のパン一個と、
せんべい一個とを取り、それをその脂肪と右のももの上に置いた。
- 27 . それから、彼は、その全部をアロンの手のひらとその子らの手のひらに載せ、奉獻物として主に向かって揺り動かした。
- 28 . ついで、モーセはそれらを彼らの手のひらから取り、祭壇の上で、全焼のいけにえとともにそれを焼いて煙にした。
これらは、なだめのかおりとしての任職のいけにえであり、主への火によるささげ物である。
- 29 . モーセはまた、その胸を取り、奉獻物として主に向かって揺り動かした。
これは任職のいけにえの雄羊のうちからモーセの分となるもので、主がモーセに命じられたとおりである。
- 30 . それから、モーセはそそぎの油と、祭壇の上の血を取り、
それをアロンとその装束、
彼とともにいるその子らとその装束の上に振りかけて、
アロンとその装束、彼とともにいるその子らとその装束を聖別した。
- 31 . そして、モーセはまた、アロンとその子らに言った。
「会見の天幕の入口の所で、その肉を煮なさい。
そしてそこで、それを任職のかごにあるパンといっしょに食べなさい。
私が、アロンとその子らはそれを食べよと言って命じたとおりに。
- 32 . しかし、肉やパンの残りは火で焼かなければならない。
- 33 . また、あなたがたの任職の期間が終了する日までの七日間は、会見の天幕の入口から出てはならない。
あなたがたを祭司職に任命するには七日を要するからである。
- 34 . きょうしたことは、あなたがたの贖いをするように主が命じられたとおりである。
- 35 . あなたがたは会見の天幕の入口の所で、七日の間、昼も夜もとどまり、主の戒めを守らなければならない。
死なないためである。
私はそのように命じられたのである。」
- 36 . こうしてアロンとその子らは、主がモーセを通して命じられたことを残らず行なった。

説教

レビ記 8 章から 10 章までは祭司の任職について規定されます。

祭司というのは神さまとイスラエルの人々の間に立って奉仕する人々です。

神さまは直接イスラエルにご自身を顕されたのではありません。

そうではなく、幕屋を通して、そして祭司を通してご自身を顕されました。

こうある通りです。

「わたしは会見の天幕と祭壇を聖別する。

またアロンとその子らを聖別して、彼らを祭司としてわたしに仕えさせよう。

わたしはイスラエル人の間に住み、彼らの神となろう。」（出エジプト 29:44,45）

かつてシナイ山に於いてモーセによってご自身を顕した神さまは、

荒野を旅するイスラエルに、幕屋に於いて、祭司によってご自身を顕されます。

それで、8 章では、祭司の聖別、中でも「アロンとその子ら」という大祭司の任職について特別に規定するのです。

大祭司の聖別の儀式は、水の洗い、着衣、油注ぎ、いけにえの四つに分けられます。

イスラエルの会衆が天幕の入り口に集まってじっと見つめる中、

大祭司はまずからだを水で洗い清められます。

水の洗いは罪のきよめを象徴します。

つまり、大祭司はその罪をきよめられねばなりませんでした。

次に、大祭司用の服を着せられます。

大祭司用の服は八つの部品から成り立っていました。

うち四つ（服、帯、帽子、ももひき）は一般の祭司たちも着用するもので、

残り四つ（青色の上衣、エポデ、胸当て、帽子の上に巻かれた金の帯）は大祭司特有のものでした。

「青服」の「青」は青空の「青」で、この世の者ではない、天国に属する者であることを象徴します。

つまり、大祭司というのは、

この世に属していながら、しかしこの世の人ではない、神さまの側に属しているということになります。

さらに、

その上に、金、青、紫、緋色の撚り糸で巧みに織られた、

亜麻布製の優美な「エポデ」（腰巻きのような物～以前はチョッキのようなものと考えられていた）をまといます。

この「エポデ」は、幅の広いズボン吊りのような「肩当て」でずり落ちないように固定されます。

その左右の「肩当て」には、イスラエル六部族ずつの名を刻んだ「しまめのう」が一個ずつ金の枠にはめ込まれます。

そうして、この上に「さばきの胸当て」をまといます。

「さばきの胸当て」は長方形の亜麻布を二つに縫い合わせて袋状にし、そこに「ウリムとトンミム」を入れます。

「ウリムとトンミム」とは、サイコロのような、神さまの御意志を伺うための、一種の神託の道具であったようです。

「さばきの胸当て」は「エボデ」と同様に亜麻布でカラフルに美しく織られました。

表面には金細工が施され、十二の区分に仕切られて、

仕切の中には十二部族の名を表象する十二の宝石がそれぞれ各部族の名を一つずつ刻んでめ込まれます。

「青服」の裾には、「ざくろ」と「金の鈴」が交互につけられます。

「ざくろ」は(多くの実を持つことから)肥沃、生命の象徴とされ、大祭司の権威と力をあらわしました。

頭には、亜麻布製のターバンをかぶり、

正面には「主への聖なるもの」と彫り込まれた「純金の札」がつけられて「青ひも」で固定されました。

以上見てきたように、大祭司の服装は、とても美しい、きらびやかなものでした。

真っ白い亜麻布の「エボデ」に、

金、青、紫、緋色の美しい刺繍、天空を表す「青服」と、

極めつけは、大粒の宝石が十二個はめ込まれた「さばきの胸当て」と、

「主の聖なる者」と書かれた、頭の「純金の札」です。

このように、大祭司は、神と人とを各々代表しました。

大祭司は、神の栄光を人々にあらわし、

同時に、人々の代表として神の前に立ったのです。

大祭司は、

これは「主の聖なる者」だと書かれた、朽ちることのない「純金の札」を、自分の頭の上に掲げて、人の前に立ちました。

そして、人々に律法を説き明かして教えました。

律法によればどちらでもよいような問題に関しては、

「さばきの胸当て」から「ウリムとトンミム」を取り出して、白黒解決をはかりました。

そうやって、大祭司は、神さまから遣わされ、神さまを代表して、人々の間に神の栄光をあらわしたのです。

同時に、大祭司は、イスラエルの人々の代表として、神さまの前に立ちました。

左右の「肩当て」には、イスラエル六部族ずつの名を刻んだ「しまめのう」が各々一個ずつ置かれます。

そして、その胸には、これまたイスラエル十二部族をあらわす十二の宝石が置かれました。

「肩」は主権と責任を表し、

「胸」は慈愛、愛情を表します。

つまり、大祭司は、イスラエル十二部族を各々六部族ずつ自らの肩に乗せて、神さまに執り成し祈るのです。

すなわち、大祭司が、いけにえの血によって、自分自身の罪を贖う時には、

自分だけではない、自分の両肩に刻まれた、イスラエルの全部族の罪をも、同時に贖うことになります。

このように、大祭司というのは、イスラエル全部族を代表するのです。

そうやって、イスラエル全部族を代表して、イスラエル全部族に成り代わって、イスラエル全部族の罪を贖うのでした。

だから、大祭司ひとりが至聖所に入って（契約の箱に血を振りかけて）罪を贖うだけでいいんです。
イスラエル全員が至聖所に入って罪を贖わなくても充分です。
何故なら、大祭司は、イスラエル全部族の全責任を背負って、罪を贖うからです。

大祭司任職の話に戻りますが、
三番目に、大祭司は油が注がれます。
油は、旧約に於いても新約に於いても「聖霊」の象徴です。
神の霊が注がれ、
神と息の合ったパートナーとなって、
そうやって神と共に生き、神の御心をなして生きようになるのです。

そうして、四番目にはいけにえが捧げられます。
大祭司任職に当たってのいけにえは、
まず「罪のためのいけにえ」が、
次に「全焼のいけにえ」が、
そして最後に「任職のいけにえ」が捧げられます。

「罪のためのいけにえ」と「全焼のいけにえ」は祭司以外の一般人も捧げたものです。
「罪のためのいけにえ」とは、祭司と聖所の罪を贖ってきよめるためのものです。
それで、祭司自身がそのいけにえの上に手を置いて、自分の身代わりに殺されるものとして自分の手で屠ります。
そして、神の顕れる場所である聖所の祭壇の角に血を塗ることで聖所をきよめます。
そうして聖所は再びきよさを取り戻して神の臨在が顕れる場となるのです。
このように、大祭司と雖も一般の人間と同じく罪を贖われる必要がありました。
身代わりのいけにえにより罪贖われて初めて神と人の間に立つ大祭司としての働きができたのです。
大祭司とは、その人が清く潔白だから大祭司に任命されたわけではありません。
罪人なのです。
一般の人と何ら変わることなく、罪深いのです。
罪深いけれども、神さまに特別に召されて大祭司となりました。
それで、罪を贖われる必要がありました。
罪を贖われて、初めて神の前に立つことができます。
神さまに祈りを捧げることができます。
神さまが祈りを聞いてくださるのです。
そうでなければ、神さまは祈りを聞いてくださいません。
その祈りは汚れているからです。
罪深い者がいくら祈っても、神さまはその祈りを全然聞いてくださいません。
罪が贖われなければなりません。
身代わりのいけにえによって、罪を贖われなければなりません。
自分の身代わりに殺されるいけにえによって、罪を贖ってもらって、
初めて私たちは神さまに受け入れられ、祈りを聞いてもらえるのです。

だからこそ、大祭司の任職に際して、どうしても「罪のためのいけにえ」を捧げる必要があったのです。

大祭司の任職に際して、

次に、「全焼のいけにえ」が捧げられます。

「全焼のいけにえ」はすべて焼き尽くし煙となして神の前に立ち上らせるいけにえでした。

これは神さまへの全き献身を意味します。

大祭司は「全焼のいけにえ」を捧げることで、自分の全生涯を神さまの働きをなすものとして捧げるのです。

そうして、いよいよ「任職のいけにえ」を捧げます。

これは、先に準備した二匹の雄羊のうち、

一匹を全焼のいけにえとして焼き尽くし、

もう一匹を屠ってアロンの右の耳たぶと右手の親指と右足の親指に塗るものです。

この際、「右の耳たぶ」「右手の親指」「右足の親指」に血を塗る行為は、

それぞれの器官を聖別して、これらを神さまに捧げることを意味します。

すなわち、

「右の耳たぶ」に血を塗る行為は、大祭司が「心を尽くして神のことばに聞き従う」ことを意味し、

「右手の親指」に血を塗る行為は、大祭司が「神さまのみこころを忠実に従う」ことを意味します。

「右足の親指」に血を塗る行為は、大祭司が「神さまの道を歩む」ことを意味します。

最後の31節以降を見ると、

これらの儀式は、七日間にわたって、七度繰り返して、言い方を変えると七回度重ねて行うことが命じられます。

31. そして、モーセはまた、アロンとその子らに言った。

「会見の天幕の入口の所で、その肉を煮なさい。

そしてそこで、それを任職のかごにあるパンといっしょに食べなさい。

私が、アロンとその子らはそれを食べよと言って命じたとおりに。

32. しかし、肉やパンの残りは火で焼かなければならない。

33. また、あなたがたの任職の期間が終了する日までの七日間は、会見の天幕の入口から出てはならない。

あなたがたを祭司職に任命するには七日を要するからである。

34. きょうしたことは、あなたがたの贖いをするように主が命じられたとおりにである。

35. あなたがたは会見の天幕の入口の所で、七日の間、昼も夜もとどまり、主の戒めを守らなければならない。

死なないためである。

私はそのように命じられたのである。」

一度のみならず二度も、否、三度、四度、遂には七回も度重ねてとは、この儀式の徹底性、完全性、完璧性を意味します。

この七日間にわたる聖別の儀式を経て、初めて大祭司は大祭司となるのです。

神のものとなるということが、イスラエル全体にも、そして大祭司本人にも念入りに明らかになるのです。

**33. また、あなたがたの任職の期間が終了する日までの七日間は、会見の天幕の入口から出てはならない。
あなたがたを祭司職に任命するには七日を要するからである。**

どうしても任職のためにはこれだけの日数が必要だということです。

大祭司は、

毎日いけにえを屠り、聖別されたパンといけにえの肉を食べながら、
七日の間、天幕から離れることなく、そこで寝泊まりして過ごします。

その間は家に帰ることも許されません。

寝ても覚めても幕屋のことばかりです。

完全に世俗から分離されます。

意識も変わるのです。

そうして、その七日間は何をしているのでしょうか。

いけにえを屠り、儀式を繰り返しながら、

「七日の間、昼も夜もとどまり、主の戒めを守らなければならない」(35)のです。

そこで自分の罪が贖われていることを確信します。

しかも、一般人のように、一度のみならず、何度も何度も、七度も。

「罪のためのいけにえ」も七回捧げ、

「全焼のいけにえ」も七回捧げ、

「任職のいけにえ」も七回捧げて、

来る日も来る日も、捧げる度にいけにえの血を自分の耳に塗り、右手と右足の親指に塗るのです。

そして、さもなくば、神さまに打たれて殺されるとさえ警告されます。

34. きょうしたことは、あなたがたの贖いをするように主が命じられたとおりである。

**35. あなたがたは会見の天幕の入口の所で、七日の間、昼も夜もとどまり、主の戒めを守らなければならない。
死なないためである。**

私はそのように命じられたのである。」

「死なないためである。

私はそのように命じられたのである。」(35)

これは冗談ではなく、

大祭司は自分のいのちを賭けて幕屋に仕える自分の職務を全うしなければならないのです。

事実、10章では大祭司アロンの子どもたちが余計なことをして神さまに打たれて殺されます。

どうしてこんなに厳しいのでしょうか。

大祭司は、神と人との交わりの中心に位置しているからです。

人々は、大祭司を通して神の栄光を見ます。

人々の祈りは、大祭司を通して神に聞き届けられるのです。

それなのに、

大祭司が忠実に神のことばを守り行わないとしたら、人々は神の栄光を見ることができずに滅びるしかありません。

同じく、大祭司が神さまに忠実に生きないで汚れたままでいたならば、人々の祈りは神に聞き届けられません。

大祭司の働きにならないのです。

大祭司は、神と人の間の仲介者であるはずなのに、その役割を果たすことができません。

ですから、大祭司がその役割を果たすのに必要なのは、忠実さです。

それが揺らぐと、すべてが揺らぐのです。

大祭司は人々の代理として、そして神の代理として、何より忠実に神の命令を守り行わなければならないのです。

そういう全き神さまへの従順を、七日にわたって、その身に教え込まれたのです。

私たちも同じではないでしょうか。

罪贖われ、神の栄光をあらわす、私たちも「祭司」です。

世の人々に神の栄光をあらわさなければなりません。

そのために必要なのは何でしょうか。

罪の贖い

神への献身

耳、手、足の聖別

しかも、それを繰り返し繰り返し、何度も何度も、七度も繰り返して、

七は完全数です、

七度もということは、毎日毎日、いのちある限り、私たちの全生涯、そう生きなければならないのです。